

平成 30 年度中学校武道授業(柔道)指導法研究事業



指導内容を議論する様子

平成 30 年度中学校武道授業(柔道)指導法研究事業〔主催＝日本武道館・全日本柔道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝練馬区立貫井中学校〕は、平成 30 年 6 月 15～17 日の 3 日間、味の素ナショナルトレーニングセンター(東京都北区)において実施された。10 月に実施する第 9 回全国中学校(教科)柔道指導者研修会に向けて、安全かつ効果的な指導内容、留意事項等を明確にすることを目的に指導法発表、研究協議が行われた。

■1 日目 (6 月 15 日)

開講式では、はじめに中里壮也全日本柔道連盟専務理事・事務局長が主催者挨拶に立ち、「高校生のデータにはなりますが、平成 12 年から平成 27 年までの 15 年間で柔道の競技者数が半減しているというデータがあります。柔道には、危険、きつい、辛い、苦しいものであるというマイナスイメージがあります。中学校の柔道授業をきっかけに、柔道は楽しい、面白いものだと思ってもらい、柔道を続けてもらえると日本の柔道界としても大変良いことだと思いますので、この事業に大きな期待を持っております」と述べた。

続いて、三藤芳生日本武道館常任理事・事務局長が挨拶し、「中学校武道必修化も 7 年目ということで、順調に推移をしております。当初は採用される武道種目の多様化が予測された中、現在も柔道の実施率

が 6 割強あるということで、先生方のこれまでの努力に敬意を表したいと思います。中学校武道必修化の成功は、柔道の成功にかかっております。自分ができることと、生徒に指導して理解してもらうことでは、大きな差があります。技は示範することができますが、説明は言語表現です。言葉で説明できないといけいけないので、柔道指導を言語化していくということが大きな課題です。本事業を、柔道の素晴らしさをどのように伝えるかということ、中学校保健体育科教員の指導力の向上に結び付けていっていただきたいと思っております」と述べた。

開講式終了後、高橋健司研究者より本事業の方針として、「昨年の研修会参加者アンケート結果から、参加者は柔道経験者も未経験者も、柔道技術の指導方法と、授業の進め方のスキルを欲していることが改めてわかった。今年度は初心に立ち返り、限られた時間の中で安全かつ効果的な指導内容、手順、留意事項などを明確にし、本年秋の研修会にて伝達することを目的とする」ことが確認された。

その後、各研究者より、2 日目に発表する指導内容を説明し、初日を終えた。

■2 日目 (6 月 16 日)

研究協力者として参加した練馬区立貫井中学校柔道部生徒(40 名)を対象に、各研究者が指導法の発表を行った。発表に対し意見を出し合い、指導内容、手順、留意事項、使用する文言(柔道用語)などを議

論していった。

午前中は、中学1年生を対象とした授業（初心者指導）を想定して、高橋健司研究者が基本動作・受け身（前回り受け身以外）、鮫島康太研究者が前回り受け身・膝車、米田輝彦研究者が大腰、梶谷宗範研究者が体落とし、遊佐英徳研究者が固め技全般の指導法をそれぞれ発表した。

高橋健司研究者の発表では、基本動作として、単独で行う自然体、自護体、歩み足、継ぎ足を指導した。続いて組み方の指導では、互いに右組で組み合うこととし、組み合った状態での基本動作を指導した。受け身の指導では「畳を叩いた後、弾いて手を畳から離すのと、叩いたまま手を畳に押しつけるのでは、どちらが痛い？」といった、生徒に考えさせる問いかけも重要であるとした。発表後の議論の場面では、「横受け身を取った際の視線はどこに向けることが望ましいか」という議論となり、「どの方向であっても頭部を守ることができるので、どれが良いかということとは問題ではない。生徒に考えさせることが重要」との意見が上がり、研究協力者が再度実践の上、考えることとなった。

遊佐研究者の発表では、はじめに抑え込みの条件として、①受が仰向けであること、②受と取が概ね向かい合っていること、③取が受から束縛を受けていない（脚や胴体を絡まれている）ことを確認し、抑え方は指定せず、個々に考えさせた。それから逃れ方としてのエビ、逃れさせないための抑え込みの強化として腋締めわきしの補助運動も紹介した。発表後の議論の場面では、エビを指導する際、畳を蹴る足を左右どちらと指導するかという議論となり、高橋健司研究者が勤務校で実践している、蹴る足を指定する指導方法「エビの内足、外足」「逆エビの内足、外足」が紹介された。

午後は、中学2・3年生への指導（経験者指導）を想定して、森英也研究者が手技・腰技・足技、坂井武彦研究者が連絡技・変化技、福井学研究者が投げ技の自由練習、奥儀幸朝研究者が固め技の自由練習をそれぞれ発表した。

森研究者の小内刈りの指導法の発表後に、受は小内刈りをかけられて受け身を取る際、安全面への配慮から持っていた釣り手を離すべきか否かの議論となった。「受は、受け身を取ることに集中しているた

め、釣り手を持つ、離すを意識させるべきではないのでは」という意見が出された。

福井研究者の発表では、投げ技の自由練習として、はじめに3人1組で掛かり練習を行った。受と取以外の生徒は、引き手が引けているか、顔の向き、足の位置などを確認して、助言する役割とした。続いて、取を動かしながら掛かり練習（打ち込み）。その後、掛かり練習を行う要領で、約束練習（投げ込み）を行った。その後、①習った技のみを使うこと、②右の技のみを使うこと、③受けは潔く受け身を取ること等の注意点を確認し、自由練習（乱取り）を行った。

■3日目（6月17日）

最終日は、2日目に行った発表内容を元に、第9回全国中学校（教科）柔道指導者研修会の当日の進め方、カリキュラムの詳細、講師の分担などを話し合った。新学習指導要領に準拠しているか、柔道を専門としない参加者に対し何を提示できるかなどに留意しながら議論が進められた。最終日まで指導方法に対し、様々な意見が上がり議論してきたが、木村昌彦研究者より「細かな指導方法や表現については、安全であることを前提に、現場に委ねる部分も必要ではないか」との意見が上がった。また、研修会当日に生徒役として協力を依頼する予定の国際武道大学学生の活用方法についても議論した。

最後に講義のコマに対して、熊野真司研究者と田中裕之研究者の講義内容を確認し、参加者の意欲・関心などを高めることと、参加者の学びを深めること、全体の流れを考慮し、田中研究者の講義を初日、熊野研究者の講義を最終日とすることが確認された。



閉講式では、高橋進研究者が事業の講評を述べ、主催者挨拶として松尾貴之日本武道館振興部振興課長が、準備・運営にご尽力いただいた全日本柔道連盟事務局、ご協力いただいた練馬区立貫井中学校へ御礼を述べ、全日程が終了した。